
混沌神話～ぼくらの世界の理由～

遥 夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

混沌神話〜ぼくらの世界の理由〜

【Nコード】

N1512BA

【作者名】

遥 夏

【あらすじ】

ワレワレハ、チキュウジンダ。コンナ、セカイニ、ダレガシタ？
カミサマ、ナニシテル？（解釈はご自由に）

いちばん最初の神さま、ひとり語り（前書き）

山にむかいて目を上ぐ。

われは神を幻視せり。

ツクバヤマハレ。

ぼくは頑張る。

それだけだ。

いちばん最初の神さま、ひとり語り

絶対的な権力ってもんは、まず選挙とかじゃ作れない。

立候補は、いいの。

ただ、その後、選ぶか選ばないかを決めるヤツラがでてくるでしょう？

「選ぶ権利があるヤツ」のほうが「選ばれる側」より権利の格が上なわけさ。

社会的地位は別として、最大の権力ってもんは、統治者を選ぶ権利なんだ。

だから、誰にも統治者を選ぶ権利をあげない。

自分だけが、絶対的権利を持つヤツを決める。

それが、ぼく。

呼び名は、……ざっと八百万くらいあるんじゃない？

学術的にも芸術的にも、ぼくは表現されてて、……まあ、どんなふうにもぼくを見ようと、それはそっちの都合だもんね。

ぼくのは、ぼくだけが知っている。

それを知っているだけの存在がぼく。

ヘビが急にムカデにはならないみたいに、全身全霊でヘビがヘビとして生きるように。

ぼくはぼくであり続けるだけの存在。

大昔「神係」っていつてね……、あ、違うや。

「神懸かり」かな？

ぼくを宿らせることができる生物が誕生した。

彼ら自身の言葉でいえば、彼らは「人間」というものらしい。

彼らはぼくを、まず神って呼んだ。

ぼくからみたら、まあ、統合失調症とか解離性人格障害とか、そこらへんの次元のゆがみみたいなのところに、ぼくの姿をチラ見することが出来るヤツが、ぼつぼつと沸いてきたなと思ったんだけど。霊媒してぼくが語った（らしい）ことを口寄せするのを、彼らの仲間は信じたらしくみえたよ。

ほんとにぼくが言った？　っていうのもあるけどさ。

人格権の侵害だ、とか、思わなくてもないけどさ。

ぼくは、どーせ、人権もってないからねえ。

って、毎晩、六本木のおねーちゃんたちに愚痴ってたら、嫌われちまったい。

……ちえ。

ほら、あれだよ。

ぼくってば、年寄りだからさ。

話が長くなりがちなんだよね、話し始めると相手からすれば大昔のこととかが次々思い出されて、あの頃はよかった、あの時こうしてれば、みたいなさ。

まだ、ない？

きみも年をとればそうなるよ。

っていうかね、ぼくの人生が華やかかなりし頃ってのはあんまり思い出せなくてね、ぼくが産まれた間際のことばかり思い出すんだ。ぼくは両親いないけどね。

だって、宇宙で最初に思考したのがぼくだよ？

親なんか頼ったことねーもん。

っていうか、親？　は？　なにそれ？　ぼくを生き物だと思わないでほしいな、ふんっ！

……みたいな？

いや、いちおう、生き物なんだけど、少なくとも、繁殖の結果体としてのぼくは存在しないよ。

産まれた瞬間に「産まれちゃったよ」とか言ったからね、マジでもっとカッコよく決めたかったなあ「唯我独尊！」みたいな伝説が残ってるヤツっていいよなあ。

ん、でもさ！

天涯孤独ってカッコいいだろ？

最初っから、誰にも頼らないで生きていけたんだ。

そのうち白鳥号にのって、巨乳な母上が迎えにきてくれる、とか、そういう設定ナシだぜ？

自分で自分のシナリオ書くんだ。

ちょっと前、つつつても、人間の感覚だと長いのかな。

100年はたってねえと思うけどさ。

「人間のもっとも近くにある学問はなにか」

ってのが流行ったんだ。

哲学とか心理学とか社会学とか、惑星が太陽の周りをまわっているみたいに、人間のまわりを取り巻く学問ってのがあると思いなよ。

そのなかでも一番近い惑星ってなんだと思う？

ま、さっきのがヒントだからさ。

頑張って考えて。

ぼくは、なんにも持っていない。

持てれば持つてるほど不自由だから、持っていないのはある意味で幸せかもよ。

いやさ、誰かがぼくのことを評価したってのは、ぼくの持ち物じゃないって、その誰かさんの持ち物だと思うよ。

うん、まあ、ひとからどう見られるかって、気になるけど。

うん、大丈夫、ぼく、自分でイケメンだって信じてるから。

あ、ツラなんかないんだけどね、まあ、ほれ、歳のわりに童顔だ
と思ってる？

っつーか、ぼくって歳とっても赤ちゃん？

……まあ、いいや。

で、なんの話？

あ、……ああ。

何にも持っていないって、すげえことなんだってば。

だって、ああ、人間には言っても伝わらないかな、光ってものが何にもない本当の暗黒って、きみら見たことないだろ。

ああ、でも、想像はできるかなあ。

本当に暗いなかにポツンと自分の存在があるわけだ。

人間ってのが発明した言葉っての、そのころはぼくにはなかったけど。

自分では、こう言っただつたよ、

「産まれちゃったよ」

の、あとにさ、

「あ、ぼくが世界をつくるんだ？」

みたいな？

「あ、ぼく、神様のなアレなんだ？」

って、言っただつたつと、今振り返るとそう思えるなあ。

んで、一番最初に作ったのが、時間ね。

ぼくが産まれた瞬間には、光がなかった暗闇だつたって言っただろ？
流れるものがないから、時間なんか、なにそれ？ なにいろ？

的な。

ただ存在するだけだったって、一応バカじゃないからさ、なにかし
なきやって思ったらスケジュール帳が必須アイテムだろ。

どういう区切りで作らなきゃならないものを作っていくかな、

って、仕事すんのも一休みすんのも、自分できめりゃあいいんだけどさ。

誰もぼくを管理しない、ぼくが律しなきゃ、ぼくは存在してないのと同じなわけ。

だから、ぼくは時間づくりに励むわけだ。

カラフルってのがいいよね。

時間が分かるようにするには、黒の世界を色分けして流すのがぼくには一番効率的に思えたの。

ああ、人間のつくった信号機は、そのパクリだろ！

いつか言わなきゃ言わなきゃって思ってたけど、そうだよ、時限信号制って発想はぼくんだ。

あ、別に、知的財産権とかいう人権もぼくにはないから、どんどんパクっていいんだけどさ。

いや、言っておかないとぼく的には尊厳が傷つくみたいなの？
いろいろあるんだよ、人間が神様ってよぶようなあれでもさ。

……で、まあ、色を作る、つまり、光を作ろうと。

人間の感覚だと悦いんかなあ。

自分で自分を縛ったりムチ打ったりつねったりするのって。

なんつーの？　ひとりえす・えむ？

ぼくは、ぼくらしきものを作って、ぼくの身体にノミとノコギリと、まあ、そういう木工用具みたいな感じだと思って？　あ、彫刻刀に近いかも？……そういうので、めんたまを開いてみたわけ。

いや、だって、そうしないと、いつまでたっても暗黒的ダークサイド中二設定から抜け出せねえし。

んで、あんまりにも気持ちよくて、涙がちよぎれました。

セルフ・サービスで賢者モードってやつだね。

涙は「流れ」になって、目は「光」になって、自分の身体の痛気持ちいい衝撃ってのが「色」になったんだぜよ。

ん？ このへん、説明はぶいて大丈夫？

まあ、得てして、人間が口寄せしてるのもあながち間違いじゃないよ、たいがい想像神つてのはボツチ扱いだし、たいくつしのぎに妄想して、それが世界の元になるんだからさ。

ぼくがヤッてるのも大差ない、めんたま飛び出るほど自分を彫ってみたっただけ。

あ、漢字を「掘る」にしても大差ないけど、この場合。

で、その、自分を彫って掘じりまくってくれたぼくの分身が、目の前にうじゃこらいるわな。

みんなぼくそっくりで、かわいいわけだ。

でも、掘られたビフォー・アフターだから、ぼくの分身はめんたまないの。

で、不器用ながらも、わたくし、芸術的センスに目覚めたざますのよ。

ぼくの涙を作った、ほかのよりもちよびつと極太なノミを持ってた子に、でっかいめんたまを掘り返して、流れの管理をしろっていった。

ぼくのまぶたを彫った、綺麗な彫刻等を持ってた子に、左右別々の色の瞳を彫ってやって、光の管理をしろっていった。

ぼくに衝撃をくれた、なんつーの？ もはや拷問器具？ みたいな道具を持ってた子に、ゾクゾクするような色っぱいまぶたを作ってやって、色を管理しろっていった。

まあ、もとがぼくだからさ、あんま素直じゃねえんだけど、やっぱ、もとはぼくだからさ。

自分えすえむに満足して、それなりしっかり頑張ってるよ。

で、イツツ・パーティー・タイム！

え？　なんかへん？

色と光と流れがあったら、絶好調で踊り狂うだろ？

人間はどうかしらねえけど、ぼくんなかじゃそれが常識。

歌舞伎町のストリップ劇場とか、大きな声じゃいえないけど大好きだし。

人間だってさ。

「人間に近い学問」 「それは演劇」

つてのが答えなんだぜ？

で、目がついた三匹と目のないぼくのコピーにやんやの拍手喝采をされながら、

「なにやってんだ、ぼく」

って思ったから、もっと色んなもの作んなきゃダメだって確信するんだ。

まあ、その確信するまで、人間の感覚でいうと670兆年くらい踊り狂ってたんだけどさ。

いちばん最初の神さま、ひとり語り（後書き）

あまり気にせずに読んでください。ツツコミはいくらでもどうぞ。

愉悦の神話翻訳（前書き）

知ってしまえば、知る前に戻ることはできぬ。
脳は、人間が忘れたことも記憶するのだ。

愉悦の神話翻訳

「満月堂」という店で、訳者がこの書を手に取ったのは星暦768年の夏のことであった。

この「満月堂」の特徴を語ると、この書物の来歴も多少なり分かるだろうと考えられるので、僭越ながら紹介させていただく。

いわゆるオカルト・ショップであり、アングラである。薬事法や食品衛生法などなど、およそ27ほどの法令や条例に抵触する可能性がある店であり、例えば、訳者の体液が試験管に3ccほどに分けられ、たんぱく質補給ドリンクと（表示だけ）して一本300ユーロで売られていたりするのである。

まあ、その売れ行きの稼ぎのおかげで、訳者は14歳で博士号を取ることができたという苦学生時代があるので、あまりこの店のネガティブ面を強調しても気の毒なのだが、そうだったわけで、満月堂に、訳者は体液を卸売りに行ったわけである。

妖しげな、いや、神秘的な、と言い改めておこう。

神秘的な古道具や、ミイラ状態のなにかと言えないような物品や、腐ったミカンなどが雑然と並べられているなかに、干物のような書物がホコリをかぶっていたのである。

その書物と、目が合った。

これは、正直なところ、こう表現するしかないのだ。

訳者の目が釘付けになって、ただ単純に惹きつけられただけだったら「目が合った」とは言いたくない。

事実として、そんな事実があったら荒唐無稽としかいえないのだが、これ以上もない現実として、その「書物と目が合った」のだ。

表紙に、鍵穴があつて、そこからぎょろりと、書物が目をむいたのである。

五日の徹夜の成果で幻覚をみたのであつたら、どれほど理にかなつていると感じたことか。

しかし、幻覚ではなく、……というのも、興味本位に、その目を指で突付こうとしたのだが、ぱちぱちと瞬きを、というか、片目だからウインクだったのかもしれない、ええい、どっちでもいい、とにかく、生き物であつたのだ。

とりあえず、貧乏性な訳者は、こんなに訳の分からない物品であれば、さぞかし満月堂の主人がエライ値をつけるだろうと瞬時に計算し、こっそりとその書物を懷に忍ばせて自宅に持ち帰った。あとで聞けば、訳者の体液で換算して、ざっと3・5回分の一生を体液を絞られるただけに存在すればようやく手が届くほどの値段であつたが、その話を聞いたのは留置所の面会室でのことである。やーい、ざまあ。

とにかく、得体の知れない書物で、触り心地は老人の皮膚のようだったと言える。さらに、ありていに言つてしまえば気味が悪すぎる目がついている。だというのに、訳者は懷に忍ばせるのにコンマ数秒ほどのためらいしかなかった。その一瞬のためらいとて、盗みの罪悪感からのもので、書物への嫌悪感でためらつたのではない。念のため釈明するが、盗みがばれそうになるかならないかのスリルに情熱をかけたのではない。

この書物は、いったい何を語ろうとしているのか。

読み物のはずが、読むための目がついているのはどういふわけか。ある種、とり憑かれたのである。

学術探求という情熱的な欲望を刺激してくれる小悪魔に、魅了されたのである。

この書物は、西暦1999年、当時、地球の海の中に浮かんでいた日本という国の、首都から150kmほど西の地方で著されたものらしい。というのは、この神話を書いた筆者が、自慢げに後書きに書いていることから分かることである。

どうも、ある種の天才であり、ある種の馬鹿であつたらしい。

後書きを超訳して抜粋する。

「（前略）来月、地球が滅亡するか、人類が滅亡するか、まあ、どっちにしても、オレが来世を創ろうと決心したからにはもう安心。オレの友達って、天才多いし。あいつらと一緒に、馬鹿馬鹿しく過ごせる世界に人間を住まわすんだ（以下略）」

かつて、この島国には、小規模な宗教改革的現象が起きたらしく、西暦1999年の秋口に人類は滅亡するという妄信があつたらしいのだ（参考文献『世紀末現象の宗教史』拙著）。それを真に受けたひとりの人間が、さらに妄想を膨らませて、滅亡を楽しんでいるらしいふしを感じられる。

上記は「ある種の馬鹿であつたらしい」の根拠のひとつといえるが、天才であつたらしい理由は一目瞭然である。同じく後書きに「この本の表紙に、オレの右目を移植手術したら完成だ。楽しみ楽しみ、うふふのふ」とある。つまり、訳者が満月堂で合った目は、この作者の目なのである。何百年の月日を得たのか知らず、おそらく脳もないだろうし、まばたきをするためのエネルギーをどう消化吸収しているのか分からないが、とにかく、生きているのである。そこまでして滅び行く世界を見届けたかったらしいストーリーカー氣質が気持ちわるすぎる。いや、良い意味でだが。

一目瞭然で天才だと分かる根拠はもうひとつ。

作者自身が考案したらしい、この書物の文字である。

訳者が一番最初にとった博士号は言語学であり、それが一番得意だと自負しているのだが、それでも解析するのに相当な時間を要し

た。

作者自身はこの文字をレレレ文字、あるいはゲゲゲ文字と呼びたかったらしい。由来は不明である。

文字がひとつあるとする。

このレレゲ文字（と以降は呼ぶ）は、ひとつの文字に情報が凝縮されている。

一文字を完全に訳すと、それだけである一定のストーリーとなる。あとがきによれば「レレレ文字は、リンク参照機能という情報システムを参考にしながら、一文字一文字をよく読めば同時にいろんなことが繋がって語りだすようにしたオレの創作魔術で、結構、オレの短い人生のありったけの魔力を込めてるつもり」とのこと、時代が経ちすぎているためなのか、それとも、作者が正気で書いていないせいなのか、さっぱり意味は分からないが、ともかく、一文字にとっくりと取り掛かると鎖のようにズルズルと長文として翻訳されるような文字なのだ。

形状は「亜」という形をもとに、その内部にヒエログリフやヘブライ語やルーン文字を組み合わせたように見えるのだが、一文字の情報量として膨大すぎるほどの内容が詰まっており、驚嘆させられる。

一文字にひとつの音であるとか、一文字にひとつの意味であるとか、そういう書き方をしていたのでは、彼の考える「滅亡」までに間に合わないと考えたために、どうにか間に合わせるために少ない文字量で圧倒的な情報量を表せるものとして自分で考案したのだろう。やはり、数百年前の人間としてはどこか天才めいているが、どこか馬鹿めいているといえる。いや、悪い意味ではないが。

ちなみに、レレゲ文字は1ページにおよそ400字詰め込まれている。ページ数は約600である。

そして、訳者は、読むにつれ、訳すにつれ、ますます学術的に燃え上がったといつて過言ではないだろう。

なぜこれほどの奇人が、歴史上にまったく名を為さずに、呆れるほどの神々を騙り、満月堂という危なっかしい店の片隅にその名残しか残さなかったのか、恨みがましく思う気持ち。

あるいは、一生掛かっても見切れない映画の束のような、この膨大な神話の数々を訳すという馬鹿げた仕事をできるのは、私こと訳者しかないと思ふ自尊心。

そうしたもろもろを含めて、このカオスを翻訳してやろうと思う。

愉悦の神話翻訳（後書き）

あまり深く考えずにお読みいただきたく存じます。ツツコミ歓迎します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1512ba/>

混沌神話～ぼくらの世界の理由～

2012年1月4日09時51分発行